

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 9 月 12 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25285186

研究課題名(和文) 離島におけるアロマザリングの総合的研究：守姉の風習を中心に

研究課題名(英文) Study of allomothering in a solitary island: Focusing on Moriane

研究代表者

根ヶ山 光一 (Negayama, Koichi)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：00112003

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,500,000円

研究成果の概要(和文)：沖縄県宮古郡の多良間島をフィールドにして、そこでの子育てや地域の中での子どもの行動発達などを調査した。とくに、「守姉」という10歳前後の少女が主に行う土着的な民間伝承的アロマザリングが注目された。

その結果、多良間島は守姉を中心として多様なアロマザリングの発達した島であり、それが地域のソーシャルネットワークを支え、発展させる機能を果たしており、都会の子育て環境に再考を迫るものであることなどが明らかにされた。守姉は時代とともに変貌してきており、今後とも追跡調査が必要であると考えられた。

研究成果の概要(英文)：Childcare and the children's behavioral development in the community were investigated in Taramajima island, Okinawa Prefecture. Special attention was given to a traditional custom of childcare by a girl of around 10 years old called Moriane.

The results showed that the island is a place of rich allomothering practices including Moriane, and such allomothering practices support and even enrich social networks of the community of the island based on the trust for the caring children, which is quite different from our urban childcare styles. This kind of childcare circumstance was what our urban childcare had in the past and lost now, and gives us an opportunity to reconsider our current practices. However, Moriane has been modified and shrinking these days even in Taramajima, and hence it is necessary to make a follow-up study to consider the change.

研究分野：発達心理学

キーワード：多良間島 守姉 アロマザリング ソーシャルネットワーク 母子 地域 保育

1. 研究開始当初の背景

本研究の調査地である多良間島は、研究代表者の根ヶ山がこれまで 10 年あまりにわたって研究を継続しているフィールドであり、島の状況や島民の間柄も熟知していた。また研究については、研究代表者が「アロマザリングの島の子どもたち：多良間島子別れフィールドノート」を出版した直後で、島民も研究活動の内容を理解していた。研究の重要な拠点は保育園であり、そこでは調査協力態勢が整っていた。

研究分担者が多数であり、それぞれ独立の研究を並行して行うため、慎重な調整と丁寧な説明・同意が必要と考え、その準備を十分に行った。

2. 研究の目的

・守姉行動の研究

(1)多良間村の全世代を対象とした守姉経験に関する聞き取り調査：多良間島における守姉の時代変化を捉え、守姉風習が存続する要因を検討する。

(2)守姉体験者の出生順位と血縁関係の研究：中年以降の女性の守姉・被守姉体験における血縁関係の特徴を明かにする。

(3)守姉行動の観察：守姉行動を実際にビデオで撮影し、その実態を明かにする。

・守姉に関連する行動の研究(大人側)

(1)保育所の設立及びその位置と役割に関する歴史の変遷：多良間村立多良間保育所の開所(1979年)をめぐり、それがどのような状況の中で起こり、またコミュニティの子育て実践とどう影響し合ってきたかについて記述する。

(2)東京と多良間島における保護者の「10歳頃の女の子」のイメージ調査：東京と多良間島において、子育て経験のある男女を対象として、守姉の開始年齢にあたる「10歳頃の女の子というもの」のイメージについて調査し、比較検討する。

(3)多良間島の乳幼児を対象にした対人ネットワークの発達：0歳児ならびに4歳児を対象に、主として家族を除く地域の人々との対人的関わりの縦断的变化を明らかにする。

(4)食にみる多良間の子育て：多良間島の子育ての特徴について多良間島と東京の保育所保育を比較検討する。

・守姉に関連する行動の研究(子ども側)

(1)幼児に関する基礎的生態学研究：離島におけるアロマザリングの解明のための基礎的研究として、沖縄県多良間島において幼児の日常生活を微視的に理解する。

(2)多良間島の幼稚園児・小学生・中学生のソーシャルネットワーク：多良間島の幼稚園児～中学生のソーシャルネットワークの様相を明らかにする。

3. 研究の方法

・守姉行動の研究

(1)多良間村の全世代を対象とした守姉経験に関する聞き取り調査：多良間村出身の11歳以上の村民177人(男性59人、女性117人)を対象とし、多良間村内で守姉体験の有無やその具体的内容等に関する聞き取り調査を行った。

(2)守姉体験者の出生順位と血縁関係の研究：島の中年以降の女性15名(平均 59.5 ± 20.6 歳)を対象に、当人、当人のきょうだい、当人の子どもが過去に守姉行動を行った体験もしくは守姉行動を受けた体験についてインタビュー調査を行った。さらに中年以降の女性8名(58.8 ± 11.4 歳)に、当人のきょうだいの人数とその性別、さらに当人がもうけた子どもの人数と性別をお聞きして当人を中心としすべての守姉関係を含む系図を描き、その語りからそれぞれの守姉行動の血縁関係(誰から誰へ)を分析した。

(3)守姉行動の観察：守姉を行っている家庭を原則3か月おきに定期的に訪問し、守姉がしている事態としない事態を、それぞれ約1時間

半観察した。

・守姉に関連する行動の研究（大人側）

(1) 保育所の設立及びその位置と役割に関する歴史的変遷：__保育所設立前後の状況を経験した保護者および保育士への聞き取り，保育所での送迎時における保護者（姉兄含む）・保育士・園児のコミュニケーションの観察，政府統計データ，資料・史料の分析。

(2) 東京と多良間島における保護者の「10歳頃の女の子」のイメージ調査：子育て経験のある20歳以上の男女を対象とした。質問紙回収数は多良間島100部，東京117部であった。質問紙は10歳頃の女の子が，乳幼児に対する各種の世話をする際の有能性の評価に関する質問項目(5件法)と，明るい暗いなどのプラス マイナスのイメージを表す形容詞対(矢野ら，2003)と独自に作成した形容詞対(7件法)，合計30組により「子どもイメージ」をはかる質問項目によって構成された。

(3) 多良間島の乳幼児を対象にした対人ネットワークの発達：0歳児の母親5名，4歳児の母親6名に協力を依頼し，所定の日誌に連続5日間，自宅にやってきた人物，子どもを家に置いて母親が外出した際に子どものそばにいた人物，母子で外出した時に外で子どもと関わりがあった人物，母親を伴わずに子どもが外出した際の同行者ならびに外で関わりがあった人物，を記してもらった。日誌は3ヵ月ごとに郵送で届け，これを2年にわたって続けた。半年に1回程度，島を訪れて，母親本人へのインタビューも行った。

(4) 食にみる多良間の子育て：保育所職員に対する質問紙調査：多良間島の保育所職員7名，都内私立保育所職員14名を対象とし，職員が，保育所に入所している子どもとその家族をいつから知っているかについて，回答を求めた。保育所食事場面の観察調査：多良間島および都内私立保育所1歳児クラスの食事場면을ビデオ観察した。

東京近郊の公立・私立保育所4園の1歳児クラスの食事場面(各1回)の観察データも分析対象とした。

・守姉に関連する行動の研究（子ども側）

(1) 幼児に関する基礎的生態学研究：島内で唯一の幼稚園に通園する4，5歳児を中心に，3年間にわたり，起床から就寝時までを小型ビデオカメラで撮影しながらの参与観察をおこなった。

(2) 多良間島の幼稚園児・小学生・中学生のソーシャルネットワーク：「絵画愛情関係テスト PART(高橋，2002)」を用いて，幼稚園児(14名：年少7名，年長7名)と小学生1，2年生(10名：1年2名，2年8名)には面接調査を，小学3年生以上(62名：3年15名，4年10名，5年11名，6年26名)と中学生(43名：1年11名，2年19名，3年13名)には質問紙調査を実施した。PARTは，図版を用いて6種類18場面について，一緒に活動したい人を答えさせるものであり，本調査では原版を改変して自由記述とし，かつ，最も一緒にいたい人だけでなく，次に一緒にいたい人すべてを問うことで，各場面でのソーシャルネットワークの全容をとらえる工夫を行った。なお，幼稚園児については，首都圏の幼稚園児(16名)にもPARTを用いた調査を行った。

4. 研究成果

・守姉行動の研究

(1) 多良間村の全世代を対象とした守姉経験に関する聞き取り調査：4つの世代に分け，守姉経験，被守姉経験等を比較検討した(表1)。守姉経験・被守姉経験は，世代間の差が有意であり，若いD世代で少なかった。保育所設立が守姉の役割を代替したとも考えられるが，最も若い世代においても3割を超える人に守姉関係があるため，保育所が利用できても守姉には何かしらの機能があると推察される。

表1 世代別守姉経験者(女性のみ)

	A (1921年生-1940年生) N=26	B (1941年生-1957年生) N=27	C (1958年生-1980年生) N=29	D (1981年生-2002年生) N=35
守姉経験者	57.7%	74.1%	48.3%	37.1%
調整済みの残差	0.5	2.5	-0.6	-2.2

(2)守姉体験者の出生順位と血縁関係： の調査の協力者15名には、2名から10名までのきょうだいがおり(平均5.5名)、出生順位は1番目から7番目まで(平均3.2番目)であった。本人が守姉行動を受けた人はきょうだい順位にして1、2番目に集中しており、それ以降は自らのきょうだいからの世話を受けていた。また我が子に守姉をつけた事例はほぼ1番目から3番目の子までに限定されていた。当該の守姉と被守姉児(ウツウ)は母方のつながりが強固であることがわかった。さらに、血縁の遠近について、系図の隔たり具合からパス数(親子・きょうだいをパス=1とする)を計算したところ、パス数3(いとこ)と血縁なしもしくは遠縁の2山が見いだされた(図1)。

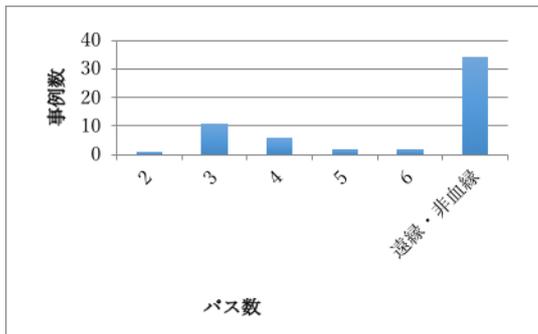


図1 守姉の血縁の遠近度

(3)守姉行動の観察：母子関係は全般に距離が大きかった。出産直後には守姉がいても母親・守姉ともに隔たりが極めて大きかったが、3か月になると守姉存在下で守姉・母親ともに接触が多発した。守姉の在不在にかかわらず高い母子の接近傾向は生後6か月の時点でも継続していたが、その後10か月になると、守姉の存在下で母子が大きく隔たるようになり、この頃からアロマザーとしての守姉の母子分離効果が顕著となった。その傾向は17か月になっても継続していたが、同じく17か月に守姉が不在の事態では母子の接触が多発しており、守姉の在不在の落差が大きか

った。

・守姉に関連する行動の研究(大人側)

(1)保育所の設立及びその位置と役割に関する歴史の変遷：多良間島における保育所の設立は、当時の沖縄各地で進んだ急激な保育所整備の波に乗るかたちで実現した。しかし、多良間における保育所という制度的アロマザリングは、保育所の中核的な機能である親の就労支援を契機として島に定着したのではなく、むしろ、本土復帰を背景とした若い親たちの幼児教育への期待があった。と同時に、それまで守姉を担っていた10歳前後の少女が通う学校の重要性も増し、クラブ活動などで帰宅も遅くなった。保育所設立後、少しずつ母親の就労の場も増え、また子守りの重責にあった祖母たちにもゆとりが生まれた。保育所の保育は、当初は手探りで「標準的な保育」を目指したが、守姉も含めた郷土の文化が衰退していく中、島外の行政システムと連続した幼小中学校とは相対的に独立した位置を保ち、やがて「多良間の保育」を志向するようになった。多良間保育所は、守姉的風土を維持しつつも状況に最適化すべく、その位置と役割を変化させ続けている。

(2)東京と多良間島における保護者の「10歳頃の女の子」のイメージ調査： について分析した結果、「保育園のお迎え」「車道危険場面での連れ戻し」といった失敗したときのリスクが高い項目において、多良間島のほうが平均得点が有意に高かった。 については11

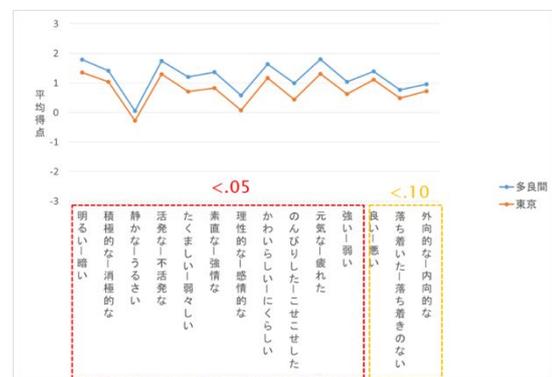


図2 「10歳頃の女の子」のイメージの比較(有意差・有意傾向あり項目のみ抜粋)

項目において有意差が認められ、その全ての項目で、東京に比べ多良間島のほうがよりポジティブな評価に偏っていた(図2)。これらのことから、東京に比べ多良間島が「10歳頃の女の子」を乳児の世話に関してより有能でポジティブなイメージを抱いていたことが示唆された。

(3)多良間島の乳幼児を対象にした対人ネットワークの発達：0歳児は母親との外出が多く、各所で地域の大人や小学生等に世話や遊びを通して関わってもらっていることがわかった。4歳児は、幼稚園を降園し自宅で昼食を済ませたあとの午後のほとんどを自宅外で過ごしており、都会の同年齢の子どもとの比較においても、友達に誘われて遊びに出かけたり、一人で外へ出かけ遊び場や友達の家を訪れたりしていることが多かった(図3)。

多良間島の子どもは、家族以外の他者との交わりが大変豊かで、幼少期においてすでに親だけに特化しない幅広い対人ネットワークを形成している点が特徴的であった。多良間島には、家族の垣根を超えて地域の大人や子どもがみなでより若い乳幼児を世話し守るアロマザリングの雰囲気があり、子どももそれらの人々に深い信頼感を寄せているようであった。子どもの対人関係の発達について考えるうえで地域特性を考慮する必要性と必然性が確認された。

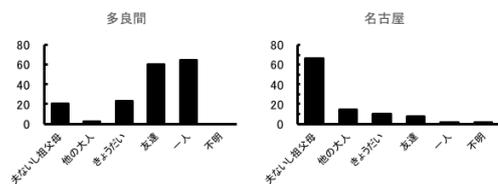


図3 子どもの同伴者

(4)食にみる多良間の子育て：質問紙調査多良間島では子どもが保育所に入所する前から、職員が子どもおよびその家族を「知っていた」場合がほとんどだった。一方、東京では、入所によって知り合いになる場合が大半を占めた。東京における保育所は

専門的な保育提供施設だが、多良間島では専門性を備えつつもそれだけにとどまらない、島全体に張り巡らされたネットワークの一部として位置づいているといえる。

食事場面観察：多良間島では(a)食卓における個人領域の区別があいまいであること、(b)食べ物や食具の共有が頻繁であること、(c)食べられるとみなされる範囲がより広いこと、(d)子どもへの間接的な働きかけが少ないことが示された。

・守姉に関連する行動の研究(子ども側)

(1)幼児に関する基礎的生態学研究：まず、乳児の多くは保育所に預けられるが、4歳児になると、養育者の日中の仕事の有無にかかわらず、すべての幼児が、島内に唯一の幼稚園に入園することになる。幼稚園においては、保育所とは異なり、正午で降園となるスケジュールである。よって、家庭外の仕事に就く養育者たちは子どもたちのためにもいったん自宅に戻り、昼食は家族団らんで食べることになる。そして、養育者たちは、昼休み終了までに職場に戻る。それ以降は、降園した幼稚園児のみのまさに「子どもだけの世界」となる。幼稚園児たちは午後において、基本的に自宅を拠点としながら、同じクラスの友達の自宅と小学校の校庭を行き来しながら遊び続け、各々の子どもたちの祖父母(おじい、おばあ)の家が中継地点となっていたことが理解できた。

(2)多良間島の幼稚園児・小学生・中学生のソーシャルネットワーク：多良間島の子どものソーシャルネットワークとして、年齢に関係なく、1)いとこがソーシャルネットワークの重要な位置を占めていた。2)アタッチメントに関わる場面で、母親以外の様々な大人が含まれていた、の2点が特徴的であった。また、年齢が上がると、診療所の医師や学校の教師が、多様な側面で子ども達の身近な存在となり、特に中学生でその傾向が顕著であった。これらの大人は医療や教育の制

度によって島外から来たものであり，中学生が「島発ち」を控えて島外に目を向け始めたことを反映していると考えられた。こうした傾向は首都圏の幼稚園での研究では見られなかった。結果に制限はあるが，多良間島での研究から，従来のように家族と友達の軸のみで子どものソーシャルネットワークをとらえるのには限界があると言えるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 14 件)

根ヶ山光一，アロマザリングの島の子どもたち：多良間島の子別れ，教育心理学年報，査読有，印刷中

Toyama, N. Intra-cultural variation in child care practices in Japan. *Early Child Development and Care*. (in press)

川田学，年齢，獲得，定型：発達心理学における『発達』の前提となっているもの，子ども発達臨床研究，査読無，第 6 号，2014 年，7-14

小島康生，親になること再考 - 子育ての生態学序説 - ，中京大学心理学研究科・心理学部紀要，査読有，13 巻，2013 年，1-10

〔学会発表〕(計 11 件)

宮内洋，生活 - 文脈 主義から見る保育現場への参入(一般公開シンポジウム「質的研究は保育実践にどのように寄与できるのか - その応答可能性を探る - 」)，日本質的心理学会第 12 回大会，2015 年 10 月 3 日，宮城教育大学(宮城県，仙台市)

小島康生，就学前の子どもによる母親と離れての外出の様相，日本心理学会第 79 回大会，2015 年 9 月 22 日，名古屋国際会議場(愛知県，名古屋市)

根ヶ山光一 【招待講演】アロマザリングの島の子どもたち：多良間島の子別れ教育心理学会第 57 回総会，2015 年 8 月

27 日，朱鷺メッセ(新潟県，新潟市)

〔図書〕(計 5 件)

根ヶ山光一，金子書房，ヒトの親子の特質と日本の子育て 平木典子・柏木恵子 編著「日本の親子」2015，267(2-20)。

小島康生，ナカニシヤ出版，親子関係と発達環境，向井希宏・水野邦夫(編)『心理学概論』第 9 章，2016，321(95-107)

山口創，放送大学出版，ライフサイクルとメンタルヘルス(1)周産期，石丸昌彦，今日のメンタルヘルス，放送大学テレビ用教材，東京，2015，252(26-39)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

根ヶ山光一(NEGAYAMA, Koichi)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：00112003

(2) 研究分担者

池邨清美(IKEMURA, Kiyomi)

帝京大学・文学部・教授

研究者番号：80201911

川田学(KAWATA, Manabu)

北海道大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：80403765

小島康生(KOJIMA, Yasuo)

中京大学・心理学部・教授

研究者番号：40322169

外山紀子(TOYAMA, Noriko)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：80328038

宮内洋(MIYAUCHI, Hiroshi)

群馬県立女子大学・文学部・教授

研究者番号：30337084

山口創(YAMAGUCHI, Hajime)

桜美林大学・心理・教育学系・教授

研究者番号：20288054

(3) 研究協力者

白石優子(SHIRAIISHI, Yuko)

早稲田大学・人間科学学術研究科・院生